



大学図書館問題研究会第 27 回京都支部総会報告

第 27 回大図研京都支部総会が 7 月 2 日（金）午後 7 時から京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館 2 階会議室において開催されました。総会参加者は 11 名でした。まず、議長（支部長）より【第 1 号議案】「2003 年度活動総括（2003. 10-2004. 6）及び 2004 年度（2004. 7-2005. 6）活動方針」について説明があったのち、討議に入りました。研究交流活動については最近の動きとしてメールマガジン創刊の準備（「京都支部 NewsLetter」（電子版））が取り上げられ、議案書に盛り込むことが提案されました。またセミナーの開催回数の目標を具体的に明記した方がよいという意見がだされ、これも議案書に追加することになりました。そのほかにも、【第 1 号議案】について意見がいくつか出て、7 箇所を修正（「後日、確認した上で修正」も含む）の上、承認されました。修正箇所については以下の通りです。

<修正前>

1. 2003 年度活動総括（2）研究交流活動

..... 参加者数は 24 名でした。

2004 年 6 月 12 日には京都ワンディセミナー「図書館員のプロフェッション」を、京都大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室と共同で開催しました。

<修正後>

1. 2003 年度活動総括（2）研究交流活動

..... 参加者数は 24 名でした。

2004 年 6 月 12 日には京都ワンディセミナー「図書館員のプロフェッション」を、京都大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室と共同で開催しました。講師として川崎良孝教授（京都大学大学院教育学研究科）と薬師院はるみ氏（大阪樟蔭女子大学非常勤講師）とお呼びしました。参加者数は 29 名でした。

[目 次]

大学図書館問題研究会第 27 回京都支部総会報告	...	1
京大図書館史こぼれ話	...	8
新支部委員挨拶	...	11
事例報告・研究発表会発表者募集のお知らせ	...	12

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm

<修正前>

1. 2003 年度活動総括 (3) ホームページとメーリングリスト

支部委員会報告や行事の案内などコンスタントに情報を会員に提供するように努めてきました。速報的なものはメーリングリスト、より詳しくまとめたものはホームページというふうに使分けるところによって効果的な広報を心がけてきました。

<修正後>

1. 2003 年度活動総括 (3) ホームページとメーリングリスト

支部委員会報告や行事の案内などコンスタントに情報を会員に提供するように努めてきました。速報的なものはメーリングリスト、より詳しくまとめたものはホームページというふうに使分けるところによって効果的な広報を心がけてきました。今年度はメールマガジン創刊に向けての準備を行いました。

<修正前>

1. 2003 年度活動総括 (4) 組織活動

会員数は88名(2003年5月現在)から87名(2004年5月現在)と減少しました。さらに今後、退職や異動による退会が予想されるため、あらゆる機会をとらえ、積極的に勧誘を努めるなど、引き続き、組織的な取り組みが必要です。

<修正後>

1. 2003 年度活動総括 (4) 組織活動

会員数は88名(2003年5月現在)から87名(2004年5月現在)と減少しました。今後、あらゆる機会をとらえ、積極的に勧誘を努めるなど、引き続き、組織的な取り組みが必要です。

<修正前>

2. 2004 年度活動方針 (1) 研究交流活動

今年度も会員のニーズに応えた研究活動の充実をはかり、会員の専門的力量形成に役立てます。また会員間のコミュニケーションを促進するため支部報の発行、ホームページの充実など、一層の努力をします。

積極的に会員間の交流の機会をつくることに努めます。

<修正後>

2. 2004 年度活動方針 (1) 研究交流活動

会員のニーズに応えた研究活動の充実をはかり、会員の専門的力量形成に役立てるため、セミナーを2回以上開催します。また会員間のコミュニケーションを促進するため支部報の発行、ホームページの充実、メールマガジンの発行など、一層の努力をします。

積極的に会員間の交流の機会をつくることに努めます。

<修正前>

2. 2004 年度活動方針 (2) 支部報について

定期発行に努めます。

<修正後>

2. 2004 年度活動方針 (2) 支部報について

定期発行(月刊)に努めます。

続いて【第2号議案】「2003年度決算、2004年度予算及び会計監査報告」が提案されましたが、2003年度決算案の収入の部セミナー参加費の備考欄の「5月ワンディセミナー」及び2003年度決算案の支出の部研究会費の備考欄の「5月ワンディセミナー」を「4月ワンディセミナー」にするなど、若干の修正を加えた上で承認されました。続いて【第3号議案】「2004年度大学図書館問題研究会京都支部役員候補」が承認されました。

大学図書館問題研究会第27回京都支部総会議案

【第1号議案】2003年度(2003.10~2004.6)活動総括及び
2004年度(2004.7~2005.6)活動方針

はじめに

国立大学は2004年4月から国立大学法人に移行されました。法人化された89国立大学・短大は中期目標・中期計画に基づき、2009年度までの6年間、運営に努め、達成状況に対する国の評価を受けます。評価は国からの運営費交付金額に反映されますが、各国立大学の図書館の予算も当然、影響を受けるでしょう。一方、2004年6月から新しい認証評価制度が始まります。この制度のもとで、国公立の大学、短大、高専は、すべて政令で定める期間内に一度、自己・点検を行い、その結果を公表するとともに、政府が認証した評価機関から第三者評価を受けることを義務づけられることになりま

した。ここには行政が評価を運営費交付金、補助金、助成金等の配分に連動させて競争的環境を作りだしたり、あるいは改善勧告を出すことによって大学を統制するというかたちが出ていますが、ここでは数値化しにくい図書館のサービスが、効率という名のもとに切り捨てられる可能性が出てきています。

このような状況下において、現場の図書館員は、予算と人員の抑制という問題をかかえつつ、サービスの多様化、高度化を迫られています。このような時にこそ、図書館員ひとりひとりの専門的力が問われています。

個々の図書館員の能力のレベルアップをはかるためには、雇用形態を問わず、すべての図書館員が協力し合い、情報の交換や研修の機会が継続的に提供されることが必要です。そのことが結果として利用者へのサービス向上につながることを積極的にアピールしていかなければなりません。また、利用者や書店・出版関係者とも積極的に交流等、幅広い人的ネットワークを育み、良好な協力関係を築いていくことが必要です。

大学図書館問題研究会京都支部では、このような状況を踏まえ、図書館員のより高度な力量形成に向けて活動を展開して来ました。

1. 2003年度活動総括

(1) 研究交流活動

2004年1月17日に近畿4支部合同例会「国立国会図書館と大学図書館の新たなる連携に向けて」を開催しました。講師として竹内秀樹氏(国立国会図書館関西館事業部図書館協力課調査情報係長)と小島和規氏(国立国会図書館関西館事業部図書館協力課研修交流係長)をお呼びしました。プログラム前半の講師2人による報告を受け、後半は活発な質疑応答のうちに終了しました。参加者数は31名でした。

2004年4月29日には京都ワンディセミナー「館種を越えた図書館協力」を開催しました。講師として河原茂記氏(京都府立図書館資料課)と小河富代氏(京都市立太秦小学校教諭)を迎えるとともに、京都支部からは大館和郎(京都学園大学図書館)が報告をしました。その後、フロアを交えてのパネルディスカッションを行い、活発な議論が交わされました。

参加者数は24名でした。

2004年6月12日には京都ワンディセミナー「図書館員のプロフェッション」を、京都大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室と共同で開催しました。講師として川崎良孝教授(京都大学大学院教育学研究科)と薬師院はるみ氏(大阪樟蔭女子大学非常勤講師)をお呼びしました。参加者数は29名でした。

(2) 支部報

新しい会員から退職者まで、執筆者の幅を広げることに努めるとともに、支部委員が積極的に執筆することを心掛けました。内容も全国大会や支部総会、新春合同例会等の報告・感想記事、会員の近況報告、連載記事(「京大図書館史こぼれ話」「本の紹介」「大図研京都数珠つなぎ」)などバラエティに富んだものにしました。

担当者の数を増やして編集体制の強化をはかりました。

(3) ホームページとメーリングリスト

支部委員会報告や行事の案内などコンスタントに情報を会員に提供するように努めてきました。速報的なものはメーリングリスト、より詳しくまとめたものはホームページというふうに使分けられることによって効果的な広報を心がけてきました。今年度はメールマガジン創刊に向けての準備を行い

ました。

(4) 組織活動

会員数は88名(2003年6月現在)から87名(2004年5月現在)と減少しました。今後、あらゆる機会をとらえ、積極的に勧誘を努めるなど、引き続き、組織的な取り組みが必要です。

(5) 財政活動

財政活動については、支部委員会として毎月状況を把握するとともに、前年度に引き続いて積極的な会費納入の働きかけを行っているところです。

2. 2004年度活動方針

(1) 研究交流活動

会員のニーズに応えた研究活動の充実をはかり、会員の専門的力量形成に役立てるため、セミナーを2回以上開催します。また会員間のコミュニケーションを促進するため支部報の発行、ホームページの充実、メールマガジンの発行など、一層の努力をします。

積極的に会員間の交流の機会をつくることに努めます。

(2) 支部報

定期発行(月刊)に努めます。

会員の多様なニーズに応え、各人のスキルアップに貢献できる内容になるよう努力します。

読みやすい紙面づくりを心がけます。

できるだけ多くの人に執筆していただけるよう努力します。

(3) 組織活動

大学図書館問題研究会および京都支部の活動を説明し、会員を増やす活動を進めます。そのために魅力ある企画を立てるように努力します。

(4) 会費

会員としての義務である会費納入率の向上に努めます。

財政活動を一層前進させるため、支部委員会において、毎回担当者から報告と提案を受け、全員で取り組みます。

また、個々の会員にあらゆる機会をとらえ積極的・直接的に声をかけ、会費納入をはたらきかけます。

【第2号議案】2003年度決算及び2004年度予算及び会計監査報告

2003年度決算案(2003.7~2004.6)

総収入	総支出	差引残高
589,612	359,981	229,631

■収入の部

項目	予算	決算	差し引き額	備考
前年度繰越金	333,447	333,447	0	特別事業基金(174,850円を含む)
2004年度会費	0	2,500	-2,500	1名(@2,500)
2003年度会費	234,900	87,500	147,400	35名(@2,500円)
2002年度会費	128,400	29,700	92,600	11名(@2,700円)
2001年度会費		2,700		1名(@2,700円)
2000年度会費		1,700		1名(@1,700円)
1999年度会費		1,700		1名(@1,700円)
支部報購読会員	0	0	0	1名(2004年度分まで前払い/@2,000円)
支部活動援助金	10,000	10,000	0	
寄附金	0	94,365	-94,365	
セミナー参加費	0	26,000	-26,000	4月ワンディセミナー (24名*500円=12,000円) 6月ワンディセミナー (28名*500円=14,000円)
計	706,747	589,612	117,135	

*2001年度より支部費を1,000円から2,000円に変更。2003年度より支部還元金を700円から500円に変更。

■支出の部

会報	90,000	110,508	-20,508	印刷費(66,168円)/送料(44,340円)
研究交流会費	160,000	197,350	-37,350	近畿4支部合同例会(84,800円) 4月ワンディセミナー(68,850円) 6月ワンディセミナー(43,700円)
全国委員会参加補助費	30,000	20,000	10,000	第1回(2003年8月23日) 第3回(2003年3月14日)
事務費	10,000	8,123	1,877	
HP維持費	24,000	24,000	0	
予備費	157,879	0	157,879	
合計	471,879	359,981	111,898	

2004 年度予算案(2004.7~2005.6)

□収入の部

項目	予算	備考
前年度繰越金	229,631	特別事業基金(174,850 円を含む)
2004 年度会費	205,000	82 名*2,500 円
未納会費	212,600	2003 年度: 48 名*2,500 円=120,000 円 2002 年度: 18 名*2,700 円=48,600 円 2001 年度: 10 名*2,700 円=27,000 円 2000 年度: 7 名*1,700 円=11,900 円 1999 年度以前: 3*1,700 円=5,100 円
支部活動援助金	10,000	
合計	657,231	

□支出の部

項目	予算	備考
会報	120,000	印刷費(70,000 円)/送料(50,000 円)
研究交流集会費	150,000	新春合同支部例会費を含む
全国委員会参加補助費	30,000	
事務費	10,000	
HP 維持費	24,000	1 ヶ月 2,000 円
特別事業基金	200,000	25,150 円を繰り入れ
予備費	123,231	
合計	657,231	

2003 年度大学図書館問題研究会京都支部会計監査報告

帳簿および現金は適正に保管・記載されていた。

2004 年 7 月 1 日

福井京子 (印)

大橋垂紀子 (印)

【第3号議案】 2004年度大学図書館問題研究会京都支部役員候補

支部委員候補 (50音順)

赤澤 久弥 (京都大学工学研究科・工学部電気系図書室)
井上 敏宏 (奈良先端科学技術大学院大学附属図書館)
大館 和郎 (京都学園大学図書館)
大綱 浩一 (京都大学附属図書館)
進藤 達郎 (京都大学工学研究科・工学部物理系図書室)
辰野 直子 (京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館)
呑海 沙織 (京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館)
渡邊 伸彦 (京都大学文学研究科図書館)

監査委員候補

福井 京子 (京都大学教育学研究科・教育学部図書室)
大橋亜紀子 (豊田工業高等専門学校図書館)

全国委員候補

呑海 沙織 (京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館)

京大図書館史こぼれ話 第十回

廣庭 元介

島館長夫妻と友人であった平野梅代先生による島楳乃夫人の人物評

昭和3年3月、島文次郎先生と高井楳乃さんは結婚されました。結婚後、暫くの間、夫妻は銀閣寺南隣の家ではなくて、東山の今熊野と泉涌寺の中間の道を東に入って、小さな神社の境内のような所に4軒の、南向きの、ちょっと高級な借家がある、その内の1軒を借りて新居とされました。東林町という住所でした。それは銀閣寺の方のお屋敷には島先生の義理のお母様が居られて、お二人の結婚にあまり賛成されなかったとか、島先生にとって初めての妻への心遣いだったという話でした。

私はこの新居へも、銀閣寺の方のお屋敷へもよく遊びに行きました。御夫婦の仲は、昭和初年当時らしい所は無く、もっと新しい、いわば現代の夫婦のように、お互いが自由気まますが許されている感じで、当時としては実にモダンでした。銀閣寺の方に戻られてからも、文次郎先生が何か仰有ると、楳乃さんが自分の意見をズケズケ云って、口争いをされましたが、決して仲が悪いという喧嘩ではありませんでした。楳乃さんという人は、他人から見れば身勝手な人と見えるかも知れませんが、いつでも真面目で、自分を隠さないで、天真爛漫な人でした。

私も川田俊子という女性が自著の中で、榎乃さんが川田順に好意を抱いていて、なれなれしくしたように書いているのを知っていますが、全く榎乃さんの性質を知らない、下司の勘ぐりとしか云いようがなく、榎乃さんという人は、招いた男性の客の背広を着せたりすることを自然にする人で、そういうことを、当時としてはスマートにやっつけてのける人だったのです。第一、自分の屋敷に自分がお迎えしたゲストをホストとしておもてなしするのは好意も恋情も関係ないじゃないですか。上着やコートを取って上げたり、着せて上げるくらいのことは、どこの奥さんでもやることではありませんか。結局、俊子という人は自信がなくて川田順を誰かに盗られはしないかと、気が気でなく、嫉妬している訳でしょう。

敗戦後、軍国主義が滅びて、急に何もかも自由だ、民主主義だ、とたがが外れ、恋愛の自由、男女交際の自由、と叫ばれた潮流を自分に引き付けて、京大教授を公職追放になった弱り目に祟り目の格好の悪いご主人より、皇太子の和歌の指導役を仰せ付かるような著名な歌人で住友本社の元副頭取の方が、自分の名誉欲や有名病を満たして呉れると踏んだだけでしょ。「老いらくの恋」なんて騒がれた頃、既に大学の先生方の間では、あれは有名人への憧れ病、ハイ・ソサイエティの仲間入り願望が原因だという見方をする方が多かったです。

多くの人々に騒がれることを厭い、世の中に身を晒したく無いという心境であれば、ひっそりと世間から遠ざかるものですが、わざわざ自伝のような本を執筆、出版して、川田順との結婚後、如何に多くの著名人と知己を得たか、如何に京大教授の妻であった頃に比べて、生き生きとした充実した生活が出来るようになったか、を語る所は、確かに飛んだ女性だったと認めなければなりませんね。

それにしても、仮にも島邸で大切な恋を芽生えさせたのであれば、俊子という人にとって、榎乃さんは恩人じゃありませんか。なのに、先に亡くなっている榎乃さんを鞭打つような形で引き合いに出すこと自体、俊子という女性の品性がどのようなものであったか、自ら暴露しているようなものですね。私は実際の榎乃さんをよく存じ上げており、川田俊子などという人の書いた本など全く気にもなりません。読売新聞がその本を出版したことにも、ジャーナリズムが、売れさえすれば良い、という商業主義で、「老いらくの恋」などと囃し立てて、面白がって利用しているに過ぎないのです。

島文次郎・榎乃御夫妻のことについては、是非、誰かが正しい伝記を書くべきだと思います。変な風にかれっ放しにしておいては、榎乃さんが誤解されたままになりますし、それは御主人である島博士にとっても謂れなき不名誉なことですからね。無責任な想像を逞しくして、まるでそれが事実であるかのように書き散らす。しかも相手が亡くなっているのでしょう。「死人に口無し」と判っていないながら、それをやるのですから、卑怯です。もっとも、自分は恩知らずで御座いますと発表して恥じないのですから、事実を知っている人から見れば厳しい目で見られていることでしょう。

さて、十回に亘って、見方によれば、何と冗長な「こぼれ話」であったことよ、と頭に来た方もあったと存じます。そして又、こんな長いこぼれ話とは思わずに原稿依頼した筈だった、と編集の方々からも内心あきれられ、叱声が口から出るのを我慢しておられたかも知れません。

にも拘わらず、このように貴重な紙面を多く使わせて頂いた理由を申し上げます。京大附属図書館では、新村出館長の前に、島文次郎、石川一という二人の館長がおられたという事実が多くの京大関係者からさえ忘れられている事が、そもそも私が島文次郎先生のことを多くの人々に知って欲しいと思うようになったきっかけです。私自身、『京都大学附属図書館六十年史』の編集に参加した時、初めて島文次郎という人が初代館長であることを知ったのでした。西田龍雄館長が私を館長室に呼ばれて、「君はこの初代館長は島という人だという論文を書いているけど、初代は新村先生と違うのか」と尋ねられたことがあったくらいです。その時、私は「新村先生は第3代目です。それは『六十年史』に書いてありますよ」とお答えしましたが、西田先生の前の言語学教授は泉井久之助先生で、第8代

図書館長の泉井先生の前の言語学の教授は新村出先生で、新村先生は第3代図書館長でしたから、言語学の歴代教授が3人とも図書館長を務められたこととなります。その西田先生が島文次郎先生のことを御存知なかったのです。

先ず、京大の明治頃の図書館長と云えば、新村出先生のことと思われてきた感があります。私が島文次郎という京大図書館初代館長の史実を調査し始めてから、既に30年以上経過し、中間報告の形で、最初は1961年(昭和36年)9月、大阪天満の歯科大附属病院の大講堂で行われた日本図書館研究会第2回研究大会において「島文次郎の図書館思想」と題して発表した原稿を基に、雑誌『図書館界』第13巻第5号に「図書館運動の先駆者としての島文次郎」と改題して掲載(この論文は桃山学院大学図書館学奨学金を受賞しました)、次に石井敦編『図書館を育てた人々 日本編1』(1983年 日図協発行)に「関西文庫協会の創設者 島文次郎」を寄稿、2000年3月には『花園大学文学部研究紀要』第32号に「島文次郎京都帝国大学附属図書館初代館長の年譜」を掲載、そして最も新しくは「島文次郎本館初代館長略伝」を京大図書館報『静脩』の「京都大学附属図書館創立100周年記念臨時増刊号」43~45ページに発表させて頂きました。

島館長の史伝を略伝から正伝にまでレベル・アップするためには、同館長の58歳になってからの遅い結婚にも触れなければなりません。そして、奥さんである榎乃さんにも言及しなければならないでしょう。幸いに将来『島文次郎伝』が完成した際に、京都の大図研が発行しておられる機関紙に初出の原稿を載せて貰えたら、これに過ぎる貴重なご縁は無いと思います。たまたま、編集部の方から「何か書け」とお誘いを受けましたので、これ幸いと飛びついた次第です。

島文次郎初代館長は1871年(明治4年)10月6日に、諫早の野口家に生まれ、1945年(昭和20年)10月10日、74歳で亡くなりました。榎乃さんは、1890年(明治23年)9月25日に、和歌山県那賀郡粉河町東川原の蜜柑農家高井家に長女トラエとして生まれ、高井家に男児が無かったので1909年(明治42年)に本田健次郎と養子縁組みをして一子・一郎をもうけましたが、健次郎は1916年(大正5年)結核で夭逝。榎乃さんは30歳を越えて、国文学の道を志し、初期の京都女子専門学校に入学、刻苦勉励して中等学校教員免許を取得、母校の女学校の教諭に就任、1928年(昭和3年)、既に京大及び三高教授を中途退職していた島文次郎元京大図書館長と再婚(島館長の方は初婚)しました。島館長逝去後、10年間に寡婦として過ごし、1955年(昭和30年)9月1日、65歳を以って京大病院において永眠しました。

このように調査する対象の人物が50年も前に亡くなっており、生きて活動していた当時を知る人々が全員生存していない場合、調査を続行することは至難の事に属し、しかもその人物を生き生きと浮かび上がらせることなど、不可能かも知れません。ほんの1行、わずか数10字の関連記事を採取して積み重ねなければなりません。

私は島文次郎元館長の父祖の地・諫早へ何か得る所がないか、と榎乃さんの一子・高井一郎氏と一緒に旅をしたことがありました。しかし、島先生の実兄・野口寧齊さんにまつわる東京での明治時代最大の疑獄事件と云われる或る事件が、諫早に誤り伝えられて、野口家は市民から忌避されていて、殆ど何一つ調べを進めることが出来ませんでした。

ただ一つ、大きな進歩があったのは、野口寧齊さんの事件の真相を、諫早在住の郷土史家であり、日本石橋の会会長でもある山口祐造氏に伝え、山口氏が諫早史談会の機関紙『諫早史談』などの出版物に事ある度に諫早市民の誤解を解く努力を開始されたことです。山口氏は佐賀鍋島藩の支藩・諫早領の藩士の全員の家伝を『諫早史談』に連載しておられ、私が諫早を訪れた際に、全藩士のトゥリー・マップを持ってホテルまで来て下さり、島元館長の実家である野口家が領主の侍医を務めた家柄であり、逼迫していた諫早家中で、上から数えて10番以内に入る石高を支給されていたことなども教えて下さったものです。

ただ残念なことは、高井一郎さんも山口祐造さんもこの数年の間に次々に白玉楼中の人となられたことです。時は待ってくれないことを一層身に滲みて感じている次第です。

それでは、この大きな「こぼれ話」の連載を終わることに致します。ご精読有り難う御座いました。

ひろにわ もとすけ 元京大図書館員

新支部委員挨拶 その1

総会で承認された今年度の支部委員より、簡単ながらご挨拶をさせていただきます。今回は大館、井上、大綱の3名からです。

■大館 和郎 (支部長) ■

今年の大図研全国大会で、前浦安市立図書館長の常世田良氏のお話を聞く機会がありました。その中で図書館の普遍的な機能としての情報提供を挙げられていたのですが、従来、「資料」ということばでとらえられていたものを、「情報」というふうにとらえ直すことによって、「情報」と各種「媒体」(印刷媒体、パッケージ系電子媒体、ネットワーク系電子媒体)の関係を把握・評価するという視点を明確にした上で、利用者のニーズを的確に判断して、最も効果的かつ正確に情報提供するために図書館員が何をできるのかいろいろと刺激的な提案をされていました。「図書館政策は情報政策である」というとらえかたは図書館と社会とのアクチュアルな関わり方に目を向けさせてくれました。

変化が早い世の中の動きに対し、図書館はどちらからという振り回されているように感じます。そういうことのないように常にアンテナをめぐらせていくように努めたいと思います。京都支部の委員もだいたい世代交代が進みました。旧来のやりかたにとらわれず、どんどんと革新的な試みに取り組んで行きたいと思います。

■井上 敏宏 (支部報編集) ■

引き続き支部報の編集を担当します井上です。お世話になっております。昨年まで京都大学附属図書館に所属でしたが、こんな(法人化一年目の)時期に出向してしまい、毎日片道2時間の距離を通勤するはめになってしまいました。「出向」ですのでいずれ、京都地区にかえってくるはずなので、奈良支部には移籍せず京都支部に残留させていただきました。今後ともよろしくお願い致します。

さて、支部報の編集ですが担当するとは言っても、上記のとおり通勤だけでも往復4時間をとられてしまい、大学の業務ですら満足にこなせていないような毎日です。この状態で大図研の支部報編集をメインで担当するのは、まず無理なので前年度から編集を一緒にして下さっていた進藤さんに編集のメインをお願いしました。私などとは違い、大変優秀で行動力もある方ですので支部報もより良

く、ひいては京都支部自体も良い方向へ引っぱってってくれるのではないかと思います。

ですので、今年度からは進藤さんの足を引っぱらないよう、心がけたいと思います。今後ともよろしくお願い致します。

■大綱 浩一 (HP と ML / 支部報編集) ■

2004 年度支部委員を務めます、京都大学附属図書館の大綱浩一です。どうぞよろしくお願いいたします。以下、支部委員を務めるにあたっての所信表明をもって挨拶とさせていただきます。

私は実務家、そう、できれば優秀な実務家になりたいと思っています。図書館がそうであるように京都支部も組織であり、組織である以上、運営を必要とします。組織運営に携わる経験の場として、積極的に支部の運営に取り組みたいと思います。

また、私はコミュニティ(共同体)におけるコミュニケーション(意思疎通)とメディア(情報媒体)のあり様に関心を持っています。コミュニティ(京都支部)におけるコミュニケーション(会員相互の理解と協力)の進展は、結局のところ、会員自身の主体的な参加なしには実現しませんが、HP と ML 担当として、また支部報編集担当として、少しでもそのお役に立てるよう、行動したいと思います。

なお、最後になりましたが、私の 人となり については次のとおりです。

「tsuna's profile」http://www14.plala.or.jp/tsuna_owlet/profile.html

事例報告・研究発表会発表者募集のお知らせ

京都支部では、来年1月に会員のみなさまから発表を頂くセミナーを開催致します。つきましては、このセミナーでご発表頂ける方を募集します。日頃から興味を持っている事、会員のみなさまと意見交換をしたい事など、テーマは自由です。ふるってご応募ください。

日時：2005年1月22日(土) 13:00-

会場：京都市国際交流会館(蹴上)

応募方法など、詳細は次号にてお知らせ致します。